

白話か文言か：日本古典詩歌の中国語訳について（その三）

——錢稻孫と『万葉集』の翻訳

呉 衛峰

はじめに

筆者はかつて和語韻文の中国訳の文体選択をめぐる、錢稻孫の『漢譯萬葉集選』を中心に論じたことがある¹。この度は同じく万葉集の中国語訳を対象にするが、異なる角度、つまり口語訳の角度から錢稻孫の訳業を検討したい。研究ノートの体裁上、資料の細部に入り込み本題からややずれてしまう箇所も存することを断っておく。

一

錢稻孫の名前を掲げると、右記の『漢譯萬葉集選』に代表される漢詩訳がすぐ想起され、同化 (domestication) 翻訳の最高峰と称されがちである。しかし、『漢譯萬葉集選』にたどり着く道程、及び歿後に『万叶集精選』（万葉集精選）

(1) 白話か文言か：日本古典詩歌の中国語訳について（その三）

として結集された錢の晩年の翻訳実践から伺えるように、錢稻孫の翻訳にはもう一つの顔が隠れているのである。

『漢譯萬葉集選』の縁起について、新村出による同書の「後語」に詳しい。それによれば、

昭和十五年、西紀一九四〇、當時の日本學術振興會の一事業たりし日本古典歐譯の最初の試みとしての、英譯萬葉集選の刊行されるころ、相期せずして、北京の錢稻孫氏が、すでに漢譯萬葉集歌を、一雜誌に發表されつつあったのを、私は僚友鈴木虎雄博士に因つて知り、示されて其の贊辭と評語を聞いたことがあつた。」とあり、「昨年（一九五八）五月中旬、日本學士院よりの歸途、歌選英譯の事業にも、附驥して參加した等の因縁の深遠なるより、熱海の凌寒莊に老を養つて棲遲される佐佐木信綱博士をお尋ねした折に、老博士から萬葉集抄を、英譯本以外に、廣く亞歐米諸國語に譯出して、斯の集の精華を示したいものだ、との抱負を私に披瀝せられ、先づ以て、善隣古國の近代語に摹譯して、同國の雅友に示したい、との熱意を語られ、それには既に錢氏の佳譯の好適なるものが、存するから、それに多少の増修を煩はし、適當に按配して、速かに出版したいものだとの希望を切述されたのであつた。」³

という。

「善隣古國の近代語」という表現が何を指すのかは不明であるが、ここで挙げられている「一雜誌」というのは『北平近代科學圖書館館刊』のほずである。理由の一つは、錢稻孫が他の雜誌で萬葉集訳を連載するようになったのは一九四一年以降である。もう一つは、錢稻孫が一九四一年の四月に彼の最初の萬葉集歌などの翻訳書である『日本詩歌選』を上梓しているが、その「跋」には北平近代科學圖書館代理館長の山室三良が「昭和十二年の六月頃から錢先生に譯していたゝいた萬葉の歌などがつもりつもつて相當の數になつたので此處に集めて一卷とした」と説明している。『北

平近代科學圖書館館刊』の創刊号は1937年（昭和十二年）9月の発行であったので、錢に万葉集の翻訳を頼んだのは当然その前にあたる。実際、『日本詩歌選』の冒頭にある万葉集一番の雄略天皇の歌の訳は、『平近代科學圖書館館刊』の創刊号に見られる錢稻孫の「日本古歌詮譯二則」に見られる同じ歌の訳とは完全に一致している。

しかし、佐佐木信綱の「漢譯萬葉集選縁起」を読むと、錢稻孫とは戦前にはすでに知り合っていたことが分かるが、時間的には辻褄の合わないところがある。読者に煩雑だと思われるも仕方がないが、以下のように引用する。

（前略）一千首を抄譯した英譯萬葉集が、昭和十五年岩波書店から公刊された。隴を得て蜀を望むといふやうに、この英譯が成稿してからは、さらにこれを基礎として五百首、三百首或は一百首をぬいた各國語譯のシリーズができたらばと、切に願ふやうになつた。折から長く日本に在住してをられた中國の錢稻孫君と、ドイツのツァヘルト君とを知ることが出来たので、漢譯には市村瓊次郎博士、獨譯には木村謹治博士に校閲してもらふといふことで、それぞれ兩君の快諾を得た。自分は漢譯は中日實業協會、獨譯は原田積善會の援助を受けて兩君に依頼し、兩君は喜んで翻譯に従事されることとなつた。ところが第二次世界大戦の非常に際會して、兩君ともに歸國せられ、連絡が途絶えたのであつたが、兩君は先約を重んじて、それぞれ母國において翻譯を完成してをられたのであつた。 4

日本では、第二次世界大戦というとき、ドイツがポーランドに侵攻した1939年か、もしくは太平洋戦争の勃発した真珠湾事件であろう。しかし、その頃の錢稻孫の在日期间については、清華大学教授としてサバティカルを利用して1935年から1936年にかけて日本で研究休暇を取っており、翌1936年8月に帰国したことを示す文章がある⁵。記憶違いで時間を間違えたのかもしれないが、とにかく佐佐木信綱が万葉集の中国語訳を錢稻孫に依頼し、承諾を得たのは事実であろう。戦時中の1942年の末、佐佐木ら十二人が選定した『愛国百一首』が発表された直後、錢稻

孫は1943年1月1日発行の『中國留日同學會季刊』第二号に「講譯日本新選「愛國百人一首」(一)」という題で万葉集より選んだ歌の訳を載せている。その後二ヶ月のうちに全訳が出来たそうで、同年の3月に『櫻花國歌話』と題を変えて出版した。翌年の8月に発行された『中國留日同學會季刊』第8号に載っている同書の広告には佐佐木のコメントがあり、「作者小傳與詩歌批評皆極適切、蓋譯者深解和歌又洞澈日本國民精神、故能為此佳譯。」(作者紹介と詩の評語は非常に適切である。和歌のみならず、日本の國民精神を深く理解している訳者のような方だからこそ、これほど見事な翻訳が出来たのである)と賛辞を惜しまなかったものである。

一一

1937年から1944年までの間、錢稻孫はおもに四つの雑誌に万葉集の翻訳を發表している。時間順に掲げると以下のようになる。

一、『北平近代科學圖書館館刊』：

①創刊号(1937年9月)、「日本古歌詮譯二則」、内容は万葉集歌一、二。に対する詳しい講釈と漢詩訳である。講釈は漢文によるものである。以下同。

②第2号(1937年12月)、「日本古歌詮譯(二)」、内容は万葉集歌四四六五、四四六六、四四六七の三首の講釈と漢詩訳である。

③第3号(1938年2月?)、編集後記の日付による)、「日本古歌詮譯(三)」、内容は万葉集歌三、四に対する詳しい

講釈と漢詩訳である。

④第5号（1938年12月）、「萬葉集抄譯」、内容は志貴皇子、大伴家持、柿本人麻呂などによる十首の歌の日本語原文と漢詩訳である。講釈はなし。

二、『中國留日同學會季刊』：

①第2号（1943年1月）、「講譯日本新選「愛國百人一首」（一）」、内容は『愛國百人一首』において万葉集より選んだ柿本人麻呂から大伴家持までの二十三首の歌の漢詩訳と評語である。

②第3号（1943年3月）、「安貴王歌一首并短歌」、内容は万葉集歌五三四、五三五の翻訳と原文である。評語あり。

③第3卷第2期、通巻第7号（1944年3月）、「萬葉一葉」、内容は万葉集歌一八〇九、一八一〇、一八一一の詳しい講釈と漢詩訳である。

三、『中和月刊』：

①第2卷第2期（1943年2月）、「萬葉集選譯」、内容は萬葉集一、二、五、八、一三、一四、一五、一六、一八、二五、二八、二九、三六、三八、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、六二、六三、七六、七七、七九の漢詩訳と簡単な評語である。原文はついていない。

②第2卷第3期（1943年3月）、「萬葉集選譯 二」、内容は万葉集歌一三二、一三三、一三三、一三五、一四〇、一五三、一六七、一八一、一八四、一八五、一九四、一九六、一九九、二〇七、二一〇、二一七、二二〇、二三〇の漢詩訳と簡単な評語である。原文はついていない。

③第2卷第4期（1943年4月）、「萬葉集選譯 三」、内容は万葉集歌二三五、二三九、二五七、二六四、二六六、二九七、

- 三〇四、三一五、三一七、三一八、三一九、三二〇、三二二、三二四、三二八、三三七、三三八、三三九、三四〇、三四一、三四二、三四三、三四四、三四五、三四六、三四七、三四八、三四九、三五〇の漢詩訳と簡単な評語である。原文はついていない。
- ④第3巻第2期（1944年2月）、「萬葉集譯漢」、内容は万葉集歌一八〇九、一八一の漢詩訳と簡単な評語である。原文はついていない。
- ⑤第3巻第7期（1944年7月）、「萬葉集選譯」、内容は「貧窮問答歌」や「好去好來歌」を含む十一首の万葉歌である。原文も評語もなし。

四、『日本研究』：

- ①第1巻第4期（1943年4月）、「萬葉一葉」、内容は万葉集歌一への講釈と中国語訳である。訳は漢詩訳（文言）と口語詩訳（白話）の二種類がある。同雑誌で発表された下記のものにも大半は漢詩訳と口語詩訳の両方が付いている。
- ②第2巻第1期（1944年1月）、「萬葉一葉」、内容は万葉集歌二〇、二一に対する講釈と中国語訳である。
- ③第2巻第2期（1944年2月）、「萬葉一葉」、内容は万葉集歌八九四、八九五、八九六に対する講釈と漢詩訳である。口語訳はなし。
- ④第2巻第3期（1944年3月）、「萬葉一葉」、内容は万葉集歌五六二、二九〇三、九九三、二六一四、同「或本歌」、同「一書歌」、一五七五、二四〇八、二八〇八、二八〇九に対する講釈と中国語訳である。
- ⑤第2巻第4期（1944年4月）、「萬葉一葉」、内容は万葉集歌二三五一、二三五二に対する講釈と中国語訳である。
- ⑥第2巻第5期（1944年5月）、「萬葉一葉」、内容は万葉集歌三八六〇～三八六九の十首に対する講釈と中国語訳である。

- ⑦第4巻第2期（1945年2月）、「萬葉一葉」、内容は万葉集歌三七二三～三七三〇の八首に対する講釈と中国語訳

である。

三一

以上の四つの中で特に注目したいのは、『日本研究』に連載された「萬葉一葉」である。他の三誌での連載とは違って、七回のうち六回は口語訳がついているからである。

初回では万葉集歌一の雄略天皇の歌を扱っているが、『北平近代科學圖書館館刊』の創刊号に掲載した「日本古歌詮譯二則」の同歌の漢詩訳を佐佐木信綱の『新訓萬葉集』（岩波文庫）に従って改訳したうえ、「試譯作遙歌體」（試みて歌謡体に訳した）と断って口語訳を掲げた。

原文：

籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この丘に 菜摘ます兒 家聞かな 名告らさね そらみつ やまとの國
は おしなべて 吾こそ居れ 敷きなべて 吾こそ坐せ 我こそは告らじ 家をも名をも⁷

口語訳：

筐兒也，拿的好筐兒／簽子也，拿的好簽子／在這山岡上／挑野菜的小娘子／你家住在那裏／你叫甚麼名字／大天底下
這大和地／全是我在鎮定的／全是我在治理的／我的家，我的名／可都不來告訴你

二十世紀三十年代になると、中国の近代口語詩も徐々に洗練されてきたが、それと比べれば錢稻孫のこの口語訳は確かに「歌謡体」と言わざるを得ない。言い換えれば、これは錢稻孫の口語詩のスタイルであり、歿後に出版された『万葉集精選』に見られる口語訳も大半このような文体を取っているのである。

第2巻第1期掲載の二回目の「萬葉一葉」では、万葉集歌二〇、二一の二首が取り上げられている。額田王と大海人皇子の贈答の歌であり、まず原文を掲げる。

天皇、蒲生野に遊獵し給へる時、額田王の作れる歌

二〇、あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る

皇太子の答へませる御歌

二一、紫草の にはへる妹を 憎くあらば 人孺ゆゑに 吾戀ひめやも。

錢稻孫は漢詩訳を掲げる前に、二首の歌を口語訳している。二一に対しては、解釈の違いで二つ訳したが、一つ目のみを掲げる。

口語訳、

二〇、在這映紅光的

紫色地裏、

禁圍場上、

時來時往；

看場的人們不會看見嗎？

你直搖着長袖！

一一、紫一般鮮艷的人兒！

若不是真心裏愛；

我怎能為他人妻，

來害這相思也麼！

訳詩では歌の上の句と下の句をセミコロんで区切られている。歌一一の最後の二文字「也麼」は、元明時代の戯曲でよく使われる襯字（一句の規定の字数以外にさし加えられた文字）であるが、発音も歌の「やも」に似ている。訳者の遊び心であろうが、錢の口語訳は民間歌謡の特徴と、元明以来の白話文学の伝統を継承しており、新文化運動以降の近代口語詩と一線を画すところもあると思う。

文章の最後に、錢稻孫は二首の歌を五言漢詩に訳したので、並びに掲げておく。

二〇、遊騁茜紫野 往來圍禁場 虞人豈不見 君袖時爾揚

一一、妹也艷於紫 鍾愛在吾心 豈為他人婦 勞思不自禁

第2卷第3期の「萬葉一葉」では、錢稻孫は万葉集に見られる当時の面白い風習を取り上げた。眉がかゆいのは、恋

人と会う前兆だということである。歌二九〇三と「太宰大監伴宿祢百代恋歌四首」中の歌五六二を見よう。

原文：

二九〇三、いとのかきて うすきまよねを いたづらに かかしめつつも あはぬひとかも

五六二、いとまなく ひとのまよねを いたづらに かかしめつつも あはぬ妹かも。

口語訳：

二九〇三、分外稀薄的眉毛。

還只教白白的抓撓着。

可幾時會到呀？

我的冤家咄

五六二、不斷的教人白抓撓着

眉毛根腳。

可幾時會到呀？

我的姣姣！

前者の原文にある「あはぬ人」は「我的冤家」となり、後者の「あはぬいも」は「我的姣姣」と訳されているのが面白い。「冤家」とは、元明戯曲の中で「恋人」を指す言葉で、「姣姣」も俗語的で「かわいい人」という意味である。錢稻

孫は終始「愛人」「情人」のような新語を使おうとしなかった。二首の漢訳も掲げておこう。

漢詩訳：

二九〇三、吾眉特疏落 還令空自抓 信可相逢兆 如何人在遙

五六二、眉根頻作癢 但令空自抓 信可相逢兆 如何妹在遙

おわりに

錢稻孫は万葉集翻訳について、ほとんど自分の翻訳方法やその理論的根拠について語らなかった。ただし、初めて雑誌に発表した前掲の「日本古歌詮譯二則」（『北平近代科學圖書館刊』創刊号、1937年9月）では、万葉集歌一の翻訳については、「又歌謠在反復永嘆，徵之三篇而亦然」（また歌謠はリフレインが多く、詩経に徴しても同じである）、¹⁰「譯文用韻通庚陽，葩經然也」（訳は庚、陽を通韻として使っているのも、詩経によったのである）¹⁰、歌二の翻訳については、「此歌時代較晚，而格調猶樸古，仍用葩經句法為譯」（この歌は時代が比較的遅いものの、格調が古樸なので、依然として詩経の句法にならって訳したのである）というように、万葉集の古い時代の部分を詩経風に訳している。

「萬葉一葉」で万葉集歌一を漢詩風に改訳したのち口語訳したが、とくにその理由を説明しなかった。その後の同連載でも説明がある場合、せいぜい「用白話試譯」（口語で翻訳を試みる）というだけにとどまっている。しかし、ここから錢稻孫が漢詩訳以外に口語訳の可能性を模索していたことが伺えるであろう。更に、遺稿を整理され出版された『万葉集精選』（万葉集精選）では、往々にして一つの歌に対して、漢詩訳、口語訳を含め、数種類の訳が提示されている

(11) 白話か文言か：日本古典詩歌の中国語訳について（その三）

ことから、彼は最晩年まで、万葉集の翻訳に関して、様々な文体の可能性を追求していたと言える。

ただし、錢稻孫の口語詩は、西洋的の文法や近代語彙をふんだんに取り入れた近代的口語詩とはやや趣が異なり、むしろ民間の歌謡風で、時々元明時代の散曲の面影を伺わせる。たとえば『日本研究』第2巻第5期の「萬葉一葉」で万葉集歌三八六〇、

おほきみの　つかはさなくに　さかしらに　ゆきしあらをら　おきにそでふる¹¹

という歌を口語訳して、

又不是王命差遣、

偏生的自出情緣、

去遠了的荒雄兒、

大海裏擺着袖子！

としたが、言葉遣いと調子は明らかに散曲に似ている。

『万葉集精選』における歌五という長歌の口語訳は、まさに散曲そのものに訳されている。

原文：

霞立つ　長き春日の　暮れにける　たづきも知らず　むらきもの　心を痛み　ぬえこ鳥　うらなけ居れば　玉だす
き　かけのよろしく　遠つ神　わが大君の　行幸の　山越す風の　ひとり居る　わが衣手に　朝夕に　かへらひぬ

れば ますらをと 思へる我も 草枕 旅にしあれば 思ひ遣る たづきを知らに 網の浦の 海女娘子らが 焼く塩の 思ひそ焼くる わが下心¹²

口語訳：

春霞飄渺，日長杳杳，

不知不觉黄昏了。

肺腑里独自伤心，

叹息像夜啼的小鸟。

奉侍着神王，

行旅在远道；

过山风，吹得我衣袖飘飘。

朝朝暮暮，离家草草。

一向自夸好汉，

究竟是旅路萧条；

这闲愁，怎得消？

网浦的海女煎盐，

煎得我内心焦了。¹³

このような訳し方は錢稻孫の翻訳文体の実験における一つの側面に過ぎないかもしれないが、漢詩訳のみならず、歌

謡体、元明歌曲体などの口語訳の試みは、すくなくとも『漢譯萬葉集選』の準備段階にあたる1940年代にはすでに始まり、この模索の作業を人生の最後まで貫いたのである。

注

- 1 「和歌の翻訳と異文化体験の問題―銭稻孫著『漢訳萬葉集選』を中心に―」『東北公益文科大学総合研究論集』第十二号(2007年6月)、五九～七二頁。
- 2 銭稻孫著『漢譯萬葉集選』(日本学術振興会、1959年3月)、一八九頁。
- 3 同前、一八九～一九〇頁。
- 4 同前、一八五～一八六頁。
- 5 韦庆媛『图书馆的另类馆长钱稻孙』、《读书》2010年8月。
- 6 歌番号は新日本古典文学大系による。以下同。
- 7 歌の引用は雑誌原文による。現在通行のものとは異なる部分がある。
- 8 歌の引用は雑誌原文による。
- 9 歌の引用は雑誌原文による。
- 10 音韻学でいえば、それぞれ中古の音韻分類である庚部と陽部に属する字は同じ詩の中で押韻することはありえない。しかし清朝の学者は、詩経では庚部の一部と陽部の字が同じ詩の中で押韻していることを発見した。つまり「韻通庚陽」である。
- 11 歌の引用は雑誌原文による。
- 12 佐竹昭広等校注『萬葉集 一』新日本古典文学大系(岩波書店、1999年5月)、一六～一七頁。
- 13 钱稻孙译《万叶集精选》(北京:中国友谊出版公司、1992年1月)、八頁。